

民俗博物館だより

Vol. VII No. 2

1980. 9. 15



(当麻町・山口神社御田植祭)

目 次

民俗学雑感 —特別テーマ展・テーマ展にみる 民俗学と生活科学の接点—	1
農耕儀礼—御田祭と野神まつり— (特別テーマ展特集)	3
ハッサク (八朔) (大和の民俗行事)	5
蛇穴の汁かけ祭り (民俗資料調査抄報)	7
お知らせ・他	7

民俗学雑感

—特別テーマ展・テーマ展示にみる

民俗学と生活科学の接点—

村井 昭一

社会人に歴史学・考古学・民俗学の三つの学問のうち、機会があれば学んでみたいと思う学問はと問えば、歴史学・考古学と答えられ、民俗学の声はあまり聞けない。なる程、歴史学は文書記録によるものであるから年代が明確で、登場人物なり出来事が周知されており、いわゆるネームバリューがある。考古学にしても遺物や遺跡の史料に基づいて、過去の時代を復原するのであるから限らないロマンが秘められている。一方、民俗学は、かつて文字をもたない階層であった農林漁民や商人・職人など一般庶民のくらしのありさまを言語と行為で伝承されたものを基本資料として組み立てる学問であって、歴史学や考古学がもっているような魅力に乏しいため、親しみが少ないのであろうと、私は私なりの解釈をしている。

しかし、民俗学の領域は、信仰問題、社会慣習、物質・技術文化など、いわゆる生活文化全般を究明する学問で、有形文化として衣・食・住から農林漁業・年中行事・神祭・村組織・家族・婚姻・誕生・葬制など、言語文化として言葉・伝説・昔話・俗説・迷信・命名・民謡など、心意現象として、霊魂・妖怪・兆・占・禁・呪・民間療法など広範囲に亘っている。これらを究明して、祖先のくらしと人生観・社会観などを探究することは非常に意義のある学問であり、じっくり取組めば、やりがいのある面白い学問ではないかと、いささか自賛している次第である。

そこで、民俗学がこれから人気のある学問として、また、貴重な学問として多くの人々の評価を高めるための方向について、文字通り雑感として述べることにする。

まず、痛切に感じることは、¹昔のくらしはこうであった、とただそれだけに終わってしまうのでは、過去を解説する学問、極端に言えば回顧趣味的なものになるのではないかと危惧される。民俗学の持味を生かし、祖先のくらしと文化のあゆみを組立て、更に一歩進んで現在の生活に結びつける新しい領域への

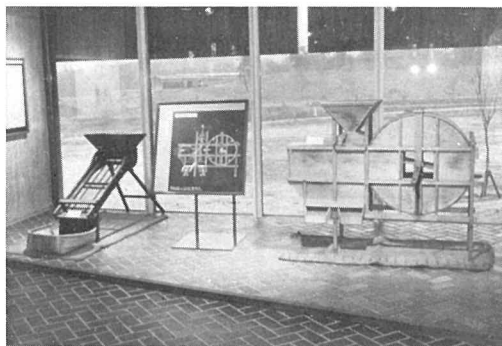
アプローチが必要であろうと考える。民俗学を現在の生活に結びつける必要性を強調し、かつ理解してもらうために、ここで庶民の昔のくらしについての概念を考察し、私見を若干つけ加えることにする。

9割近い日本人の祖先は一般庶民であり、文字のない生活をしていたのである。自然現象をはじめ道理の不明なことが多いため、今日的観点でみた場合、原始的で非科学的（ことばをかえれば経験的）な推理なり思想が社会を支配していた。古人の生活実態を極めてドライに現代的感觉で考察すれば、残念ながら無駄・無意味・無謀・徒労・ナンセンス・悲哀などの言葉があてはまることが随所にある。ロマンと呼ぶには、ほど遠い感じがえる。もっとも、それが経験的な生活の臭さを表わすのだが。

一方、明るい事実もある。科学を知らない、知識をもたない祖先が、いわば無防備の生活で必然的に体験上得た動物的本能ともいえる、くらしの中の工夫や人間社会の組織なり健全な維持を図るための慣習など、すばらしい古人の英知を結集した、高価な生活の古典を無数に知ることができる。

このような理解でこれらのことがらを具体的に丹念に整理すると、現在の私たちの生活に何を生かし、何を切り捨てるかの発想なり論議が起こってくる。より深い理解を得るため、参考として現在まで私が考えてきたことがらのうちいくつかを述べることにする。

昭和52年に「ことわざから学ぶ消費生活考」



▲展示場(稲作コーナー)

と題した冊子を作り、古人の生活の知恵を現在人に再認識してもらい、それを生かした生活を推進するため科学的根拠を付して教育をした。また、奈良県で昭和29年以来推進している新生活実践運動の実践項目である冠婚葬祭の合理化が、一部の地域を除きむしろ毎年派手になる傾向にあるが、かけ声だけでは運動の効果は出ないことが既に明確になっている。この問題の解決には冠婚葬祭のルーツなりあゆみを調べ、もし誤った俗信なり慣習により今日なお踏襲されているのであれば、それを指摘して、ムダ・ムミ・ミエを論理的に説明し、理解を求めなければ所詮は実効のあがらない運動の繰り返しではなかろうかと訴えたことがある。民俗的な事例を資料として、今日では行われない風習との対比で、昔の生活の場と異なる点を指摘することによって、民俗学が現代社会で活用される格好のモデルケースであると考えられる。民間療法についても、近代医学なり漢方が発達した現在に、今なお神がかりな療法が行われており、俗信のために生命をおとし、財産をなくしている人が多数ある。

一方農業にしても、近代農法は農薬と化学肥料に依存し昔の農業の面影はなく、農作物は鉄（機械）と油（石油）で作られ、手間も省かれている状態である。ところが、当館で今秋行う特別テーマ展でご覧いただくことになる農耕儀礼では、連綿として町や村の人々によって受継がれ各地で素朴な儀式として、たとえば予祝儀礼としての御田植祭や野神まつりなどが、春日大社・手向山八幡神社・飛鳥坐神社そして村々の小さな神社で行われている。だが儀礼で使用する農具なり、しぐさは殆んど今の農作業では見られないものである。



▲牛 耕（生駒市南田原・昭和53年春撮影）

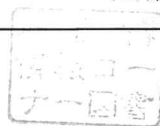
しかし、今日でもこの儀礼が現存しているということは、現代社会の中で、過去の民俗的心意が遺制としてあることや、科学的に解きあかせない「神」の存在が人々の精神に密着し、かつ儀礼の場がその村の人々のサロンの場となっていたなどのことが容易にうかがえる。できることならば、この農耕儀礼—御田植祭と野神まつり—をはじめ現存する民俗事象を通して、古き時代、いや僅か20年前の農業を考え、見直してもらいたいものである。

その他、現在当館で行っているテーマ展「日のくらし—住まいと食—」から考えさせられることをいくつか述べることにする。昔の農家や一部の家庭では、醤油・味噌・漬物・茶・布など自給自足が行われていた。家族中で共同作業をする仕事が多いため家族の対話があった。食生活は全般的に質素であったが健康体を維持していた。貴重なたん白源である川魚を捕獲する道具類にはすばらしいアイディアが生かされている。吉野地方では材木をとった残りの皮の部分を使って容器を作り資源の有効利用をしていたなど、現代人が学ばねばならないものも数多くある。その反面、よくない慣習として、茶がゆの常食があった。これは胃がんにつながるといわれているので切り捨てたい事例である。

このように昔のくらしの中には、取捨選択すべきことがら、現代社会で強く訴えたいことが無数にある。にもかかわらず、従来の民俗学の領域での研究では折角の調査資料が充分生かされていない。領域を少し逸脱してでも他の学問との交流を深め、その研究成果を実生活に生かすべきではなかろうかと考える。

今、交流の対象とする学問は、サイエンス、ライフ、リビングに関連の深い生活科学（domestic science）の分野が浮んでくる。だがこの分野は民俗学とは関連性をもたない、別個の学問である。極めてむづかしいことではあるが、民俗学と生活科学の二つの分野の学者や研究者が交流し、現代人に適確なアドバイスをすることは、まさに社会に役立つ学問であり、過去の古びた世紀の断層に、消えることのない虹のかけ橋に値いする快挙であると考ええる。

（当館館長）



特別テーマ展特集

農 耕 儀 礼

—おん だまつり の がみまつり—
—御田祭と野神祭—

大 宮 守 人

1. 企画の趣旨

今度の特別テーマ展では、稲作にかかわる農耕儀礼の中から、御田祭と野神祭を取り上げ、自然の恩恵（順調な四季の運行）によってもたらされる豊作への人々の切なる願いを最もよく形に現わしている予祝の行事として示してみたい。

御田祭や野神祭は、今日でも、奈良盆地とその周辺部で盛んに行なわれている様子を通して、人間の力だけではどうしても自然の節理や、農耕生産の本質について考える糸口にしたい。

2. 大和の御田祭

本来は御田植祭というべきものであるが、奈良県内ははじめ近畿地方では御田（オンド）祭と略称される場合が多い。

現在県内では、奈良盆地を中心に約30ヶ所もの御田祭と称する祭礼が存続している。

これらの祭のうち、1月に行なわれるもの8件、2月14件、3月3件、4月3件、5月1件、6月1件という具合に行なわれており、半数程が、2月に集中している。

また、現在では3月15日に行なわれる春日大社の御田植祭も江戸時代中期には正月の8日以後の7の日に行なわれた事が記録されている。さらに、今日4月3日が祭日となっている吉野水分神社の御田植祭も江戸時代には正月23日に行われた事が記録されており、御田祭は本来、正月に近い時期に行なわれる予祝儀礼である事がわかる。

この予祝儀礼の特色は、神への献饌、祝詞

奏上に続いて、神前で苗代づくりから、田植に至るまでの農耕の所作を模擬的に演じ、実際の農耕が始まる以前、当年の春の農作業もかくのごとく順調に進行しますようにという祈願が具体的な形に現わしてなされる点である。

その所作事は四方に青竹を立て注縄を張って神田に見たてた砂場の上で行なわれる事が多い。作男又は田主が木製のクワ・スキ・エブリ・カラスキ・マグワなどの模擬農具を実際の作業順に使う。カラスキ・マグワの所作には、獅子舞のごとく、牛の面をつけたかぶり布の中に二人入って牛に扮するが、見物の子供等がこれに対して砂を投げつけたりしてからかうと、牛も鳴き声を発しながら後足で蹴ったりして大いに暴れる。この暴れ方がはげしいほど、また砂がたくさんとび交うほど雨に恵まれ豊作になると言われる。

広瀬神社（河合町）の御田植祭が「砂かけ祭」として有名なのは、庭上の儀の折に行なう農耕所作の節々に、あまりにはげしく砂かけがなされるためである。古来から、水の神として大和川の合流点に鎮座するこの社の御田植祭に、人々の水（雨）を望む祈願が、はげしい砂かけ合戦の形として現れるのもうなづけるようである。

3. 御田祭の諸相

奈良県内でのこの行事には、大きく2つの傾向が見られる。

第1は、農耕の所作やせりふに、芸能としての様式化が見られるもの。



▲ 御田祭(平尾水分神社)



▲ 御田祭(加茂二上神社)

第2は、所作事として単調に展開され、部分的に暴れ祭りの傾向を有するものである。

前者は、猿楽・狂言に似て中世芸能的色彩が窺えるもので、^{たむけやま}手向山八幡宮（奈良市）や^{みくまり}吉野水分神社（吉野町）、平尾水分神社（大宇陀町）のものなどがこれにあたる。

また、大神神社（桜井市）や六県神社（川西町）などは、^{おむすみ}萩蒔の折のせりふに様式化が見られ、^{はやし}野依白山神社（大宇陀町）のものには、囃子方の歌と、農耕所作には様式化が窺えるが、せりふとしては風化した跡が見られる。

後者は、芸能的な様式は風化してしまったためか見られず、所作だけが無言のうちに行なわれる。但し、春日大社（奈良市）や広瀬神社のものでは、八乙女（早乙女）の田植舞に田植歌が付随している。

前者のような中世芸能的傾向のものは、数はすくないが、大寺院などの法会に付随して延年という芸能大会が中世において盛んであった事などから、古い村落ではその影響を受けて今日まで伝承しているという事も出来よう。

4. もう一つの予祝、野神祭

これも奈良盆地を中心に現在も続いている農耕儀礼で、5月初めまたは、6月はじめに行なわれる。まだ寒い初春の行事である御田祭^{（註5）}に対して、実際の農耕（田植）直前の祭りである。

この行事は、奈良盆地北部と中南部で2つの傾向のものが見られる。

中南部の田原本町鍵・今里・橿原市上品寺御所市蛇穴、天理市新泉などでは、麦ワラで長大な竜（蛇）をつくり、村の少年達がかついで、1年間に婚礼・男子の出産・新築などの祝い事のあった家を祝福して廻り、祝儀を集める場合が多い。

田植を前にしたこの時期、最も必要とする用水に恵まれるように、水の神の化身である竜（蛇）を祭り祈願を込めると共に、祭りの中心となって重い蛇体を運んで廻る若者の力だめしの行事でもある。

またこの祭りの御供のなかに、小さな農具が含まれている（田原本町鍵・今里）。

手の平にいくつも乗せられる程度のクワ・スキ・カマ・カラスキ・マグワなどの模型を

カシの木で作り、ドサンバコ（土産箱）と称する折箱に入れて竜（蛇）と共に持ち歩き最後に御供として供える。

天理市新泉では、神前の庭で、子供が小型の農具模型を麦ワラで作った馬や牛に引かせ小さな農耕の所作をし、御田祭と野神祭を合わせたようなものになっている。

奈良盆地北部の野神祭では、6月1日の夜明け、飼牛を連れて野神の木に参るという事があった（奈良市北市・芝辻）が、今日では牛を飼う家がなくなったので、御供であるチマキを供えて各戸に配るのみとなっている。

今回の特別テーマ展ではこれらの類例を数多く見ていただきたいと考えている。

- 〔註1〕 祈願祭をしてマツナエを配るだけの御田祭も含む。
- 〔註2〕 現在当館で確認しているもののみである。
- 〔註3〕 『南都年中行事』 村井古道著（元文5年序）喜多野徳俊 訳・註 綜芸舎
- 〔註4〕 『大和国高取領風俗問状答』
- 〔註5〕 大宇陀町野依の御田祭は昔から5月5日に行なわれたといわれる。



▲野神まつり（天理市新泉一本木神社）



▲野神まつり（橿原市上品寺）

ハッサク(八朔)

浦西 勉

奈良県の農村では、稲の収穫をま近にひかえた9月1日をハッサクと呼ぶところが多い。あるいは前日の8月31日から9月1日にかけての宮ゴモリをハッサクゴモリと言うところがある。また9月1日につくるモチをハッサクのニガモチなどと言っている。このように9月1日をハッサクと呼ぶことが多い。ハッサクという言葉は「八朔」と書かれ、本来陰暦8月1日の意味である。暦が太陽暦にかわってもこの名は残され、陰暦8月1日に近い月遅れの9月1日をハッサクと呼びならわし続けている。

県内には9月1日をハッサクと呼ぶ人は多いが、その伝承や行事は、民俗の報告書を見るとさほど密度の濃いものは見受けられない。しかし次に紹介する報告書を見てゆけば判ってくるが、このハッサクの頃は村の人々（特に農民）にとって重要な日になっていたようである。ではハッサクについての伝承を次に紹介してゆくことにしよう。

盆の月（旧7月）が終わるとハッサク（旧8月1日）である。「盆のしまいで八朔や」という。「八朔芋で子が若い」というが、ドロイモを掘り、イモ汁をつくり神棚・仏壇に供えて食べた。仕事は休みである。ハッサクから浴衣を袷に着がえ、夏の昼寝を止めにした。そこで「八朔しもうたら昼寝もしょまい、芋の汁くて腹が立つ」と謡ったものである（『下田村史』）。

昼寝は八十八夜からハッサクまでという（『高取町史』）。

ハッサクから昼寝のとりあげで、いよいよヨナベが始まる（『五条市史』）。

旧8月1日、ハッサク休みといって農家は昼から仕事を休む。また「半夏生半作、八朔から昼寝なし、芋の名月から芋の汁食うて夜なべする」という言い伝えがある（『下市町史』）。

ハッサクはヒンナカ（半日）仕事を休んで、餅（ハッサクモチ）をついたり、素麺を作ったりするだけで、この日をもってヒンネ（昼

寝）の終わりで、ヨナベの始まりとしているところが多い。「ハッサクしたら腹がたつ」「ハッサクしたらヒンネもやめて、つらいヨナベもしにやならぬ」とか「ハッサクの餅は苦い」などということばも生まれている（『奈良市史』）。

以上あげた例は、おそらく奈良県全域にわたって言われているハッサクの日の伝承であると思う。農耕にたずさわった人は、八十八夜から昼寝をし、このハッサクの日を限りとしたのである。またこの日からヨナベが始まるのである。これらのことは、明確に季節の変りめをあらわしているものであり。夏から秋への移行する日がハッサクとして存在しているのである。

次にもう少しハッサクの伝承について見てゆくことにする。

昔は旧8月1日のハッサクには氏神へ弁当を持って集り、宮ゴモリをして食事をした。今でも西阿田ではハッサクの宵に宮ゴモリをする（『五条市史』）。

ハッサクの日（9月1日）夕方からムラ中の家は重箱にごちそうを入れて氏神に参り、境内で家ごとにむしろをしいて食べ、宵のひとときをすごす。ハッサクゴモリという。また8月31日には福住町の人が氷室神社に集ってミヤゴモリをして9月1日には千燈明をあげる。（『天理市史』）。

ハッサクゴモリといって社寺その他で2泊3日おこもりをし御馳走をたべる。母里ではハッサクの前夜神社へ来て踊る。本年の踊り終りである（『榛原町史』）。

夕方から氏神の前で村中が弁当持参をし、二百十日、二百二十日の風の静かなように祈る（『奈良県風俗誌 大柳生村』）。

以上あげたそれぞれの例は、ハッサクの日に村々の人が氏神の境内で宮ゴモリをする風習が見られることを紹介したのである。先に示したとおり夏の昼寝から秋のヨナベへの季節の明確な変り目であり、宮ゴモリをするのがこの日の風習なのである。この宮ゴモリは

最後にあげた大柳生の例のように風の祈祷の意味がある。つまり立春から数えて二百十日はちょうどハッサクの頃にあたり、このころはよく台風が襲来する。稲の開花期もちょうどこのころで、あまりの強風は稲にとって最大の敵になるのである。うまく通過しないと稲の実が結ばぬ結果になるため台風を恐れた。春から稲を養ってきた農民の苦労がこの風のため全く無駄になってしまうのである。この日のオコモリは農耕にたずさわる人達にとって重大な祈願の意味を有している。そのためこのころにはあちこちで風の祈祷が行なわれている。室生村大野ではハッサクの前日からオコリトリとってみそぎをしたという。同じく室生村古大野ではハッサクのころ2泊3日も宮ゴモリをし、千灯明をあげたり相撲をとったりしたという(『室生村史』)これなどを見るとかなり切実な願いが込められていたのである。ハッサク頃の宮ゴモリは、おそらく古い時代から農民にとって重大な祈りの日でもあったと考えられる。

以上あげた県内のハッサクに関する伝承であるが、かなり広い範囲にこの伝承は分布していると思う。ここに上げたハッサクの日の伝承をもう一度要約すると、農業を中心としていた時代において、夏から秋への移動する日であり、また稲作の最後の難関を通過するための祈願の日でもあったのである。農耕にたずさわった多くの我々の祖先がもっていたハッサクの日を忘れることのできない重大な日であったのである。

その他ハッサクについての伝承を記しておく。ハッサクの朝、竹藪の中に行って露にかかると年中無病ですむという(『奈良県民俗

誌、辰市村』)。縁づいた人が里へ戻る日である(『都祁村史』)。ハッサクに関する伝承はまだまだあると思うが、以上が県内において聞かれるものである。

さてこのようなハッサク行事はいつごろから行なわれたのであろうか。知りたい疑問であるが奈良県内の場合においては全く不明な点である。室町時代の一条兼良があらわした宮中における年中行事の『公事根源』(1422)には次のように記されている。^{註①}ハッサクは宮中で本来の行事でなく、世俗で守られていた行事であり、建長(1249~1255)の頃に行なわれていた。その行事の内容は「田のみとてよね(米)を折敷かはらけなどに入れて人のもとへつかはしける。」と記されている。「田のみ」は「田の実(米)」であると同時に「頼み」であり、それを人のところへ持ってゆくというのである。また同書に文永の七・八年(1270・1271)の頃より天下に行なわれるようになったという記録も紹介している。同書にはもう一例後嵯峨天皇(1220—72)が皇太子のころ、田の実を献上したことが御即位する吉祥になったと記されている。これなどを見ると、鎌倉時代の始めごろさかんに行なわれるようになったようで、特に「田の実」を贈物する風習があったようである。頼みとする人のところに物を送る風習がこの頃あったようで『吾妻鏡』の「宝治元年(1247)八朔」の条に、恒例の贈物停止の事などと記されているのを見ると、^{註②}かなり盛んにこの日、贈答が行なわれていたことと想像できる。

これらは記録にあらわれたハッサクであるが、地方では古くから先に見たように、夏から秋への季節の変わり目に当る日であり、稲の収穫をひかえ強風がこぬようにと祈る日であったと考えたほうが理解しやすいであろう。

註①『新註皇学叢書』五

②『新訂増補 国史大系』吾妻鏡第三



▲宮ゴモリ(山添村毛原)

蛇穴の汁かけ祭り

徳田陽子

御所市蛇穴の野口神社の汁かけ祭りは、戦前は野口講という講中で行なったが、戦後はムラ全体の行事になった。現在は第1組から第12組までに組わけして、毎年2組ずつ順番に祭りの準備にあたる。そのなかからトウヤ（当家）を決める。トウヤ渡しするとき、新トウヤに木彫蛇体の御神体が渡される。新トウヤは御神体を1年間自分の家の床の間におき、水・洗米・塩を供え、野口神社の掃除などもする。

祭りの前日の5月4日には、毎年、中島佐吉氏（明治33年生）が半日がかりで稲藁の蛇頭を製作し、トウヤの床の間に飾る。両目は竹筒、口は赤い紙で作る。

汁かけ祭りは、5月5日に次の順序で行なわれる。

1. 午前4時、太鼓を叩きながらムラを歩き回る。
2. 午前8時、トウヤの家に区長・青年団など約40人の男達が集まり、酒を一杯飲んでから、床の間の御神体や藁製蛇頭・御供物などをもって野口神社に行く。まもなく組んである槽の上に蛇頭をおく。槽の下で、青年団員がワッショイ、ワッショイと囃しながら、蛇頭の後ろからたらしっている縄3本の芯に藁1把ずつをはきみながら三つ編みにし、約15メートルの胴体を作る。その上に、曳きやすいように胴体各部に縄を結びつける。2時間ぐらいで完成する。
3. 午前11時30分すぎ、御神体や御供物をいた祠の前で神官が祝詞をあげる。
4. 正午、蛇綱曳きが始まる。青年団のもつ太鼓の後ろに、子供達が曳く藁製のジャ（蛇）が続き、ムラ中を練り歩く。各家の前で、囃しながらジャを上下にくねらせる。昔は1軒1軒家の中に入ったが、現在は新旧トウヤ宅へ入るだけである。

5. 午後3時すぎ、行列が神社に戻る。ジャを境内の木にかける。木のそばの蛇塚にかけた時期もある。

6. 午後4時頃、トウヤ渡しがある。新トウヤ宅で神官が祝詞をあげる。

7. 午後4時30分、ゴクマキ（餅まき）が行なわれる。

このような汁かけ祭りは、奈良県下にみられるノガミ祭りと同じである。ジャは水神であると同時に田の神でもあり、蛇綱曳きは田の神に水乞いをし、豊作を祈る稲作始めの行事である。汁かけ祭りは名前のみで、今は参詣人にワカメ汁をかける行事はやっていない。地元の人々は、祭りをジャマツリ、蛇綱曳きをジャヒキともいう。

資料としては、野口小平氏宅の嘉永年間（1848～1853）の『野口大明神社記』、小谷重孝氏宅の明治期（1867～1911）の『野口神社祭典式并ニ什宝帳』などがある。前者をみると、汁かけ祭りが江戸時代末には行なわれていたことがわかる。明治期の様子もわかり、貴重である。



▲木にかけられたジャ（蛇）

★★★★ お知らせ ★★★★★

●民俗博物館の行事予定

55 8月31日～12月21日（隔週日曜・10回）

民俗学カルチャーサロン（募集制）

9月28日 体験学習講座《カゴづくりⅠ》

10月5日～11月24日

特別テーマ展「農耕儀礼―御田祭と野神まつり―」

☆上記の展示開催につきテーマ展示室を9月30日～10月4日（5日間）まで閉室します。

常設展示室は開室しています。

10月12日 民家講座（PM2～）

テーマ 「家^{まじな}にまつわる呪いの世界」

講師 奈良大学助教授 水野正好氏

テーマ 「集落・町並について」

講師 奈良国立文化財研究所 平城宮跡発掘調査部長 岡田英男氏

10月19日 特別テーマ展特別講演（PM2～）

「農耕儀礼」展列品解説

当館学芸員 大宮守人

テーマ 「村落と芸能―サブタイトル未定―」

講師 京都府教育庁 文化財保護課主任 植木行宣氏

10月26日^{*} 体験学習講座《カゴづくりⅢ》

11月23日^{*} 体験学習講座《ワラフゴづくり》

12月21日^{*} 体験学習講座《シメナワづくり》

※体験学習講座は、いずれもAM11～とPM2～の2回です。

《表紙解説》 毎年4月23日に当麻山神社で御田植祭が行なわれる。午後2時すぎに祭典が始まり、その後御田植祭の神事が行なわれる。五穀豊穡の願いが、田植の所作に盛り込まれているのである。

■編集後記■

8月上旬の過しやすい夏の陽が、次第に夏らしくなった8月半ば過ぎ。そして、9月半ば。夏のキラキラ照り映える陽が、余韻を残して初秋の空をやく。蒼白い焰と黒く燦る煙を漂わせながら。

博物館も夏から秋に移るいまの気候に似たものが感じられる。すがすがしい秋風を待つ公園の樹木。初々しさを取戻せなくとも、生長した姿を年々残したいと願う博物館・民家・公園が視界にある。

（㊄）